

【十編】

○P107 学問をすることで日本の地位をあげる・・・とある

・そもそもなぜ学問をすれば日本の地位が上がるのだろうという投げかけに、学問をすれば経済や農業など国益につながる分野が発展するから・実学を学べば国の技術が発展するからという意見が出た。

・福沢の言う学問の二つの側面がある 学問・・・飯炊き・農業・商業
・・・天下の事・経済

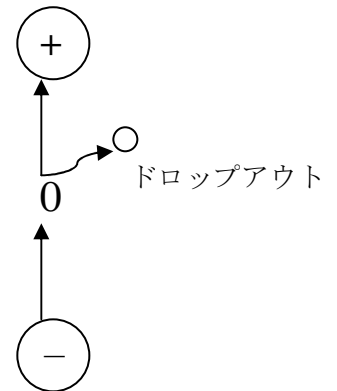
・文明(civilization)・・・全世界に行き渡っているもの。マクドナルドなど普遍的なもの
文化(cultivation)・・・その国独自の習慣、風習、伝統など
(文化と文明が対比されると文明が悪い意味になる)

○p110 “ここに沈湎冒色放蕩無頼の～”とある。この例えは何だろうかという疑問が出た。

・学校での勉強で満足してはいけないという意味では。悪い部分を改めただけでよくやったとほめてはいけない。それだけで喜んではいけないという意見が出た。0 (標準) より下にいる人間が0になっただけのこと。

・この説は、自堕落な人間に言うのであって、学問をする者に言うことではないという意味で使っているのでは。

・最近はそのような学者が多いということを行っているのでは。学問を得て生計をたてるためにドロップアウトせずに、もっと高みを目指すべきだと言っているのではという意見が出た。



○p112 西洋料理は何を例えているのか

・形だけ真似ることではなく、西洋の精神を学ぶべきだと言っている。
・ドロップアウトして得られるちょっとした上等なものの象徴として言っているのでは。

【第十一編】

○名分 (建て前) ではなく、職分 (自分の立場の責任) を負わせることができれば名分論が通用するとは・・・

- ・ここで文化祭実行委員と委員長の例えが出た。委員長一人が全てを把握し、指図するだけでは委員が自分の責任として動くことが難しい。ここは君の責任ある役割だと振れば、自分の責任だと認識して動く。名分とは御恩と奉公のようなもの。そういう時代は終わった。一人一人が職文をわきまえ、やっていくべしと言っているのでは。
- ・原著のこの文脈では福沢は名分論は否定的に書いているのに対し、現代語訳のほうでは、(名分論が)“通用する”となっている違いがメンバーによって指摘された。

【十二編】

- ・p124 “書をして読まざるべからず、書をして著さるべからず・・・”については、本当に学問をしていると言うには、専門外の人間に説明ができてはじめて学問を勉強するということを言っているのではという意見が出た。
- ・p126～人と比べて満足すべきではない。簡単に自分に満足せず、常に高みを目指せと言っている。

【十三編】

○怨望について

怨望・・・ねたみ、他人の幸福を怨むこと

窮・・・窮屈の窮

- ・人を女たらしだという人は、自分が積極的に動かないことを棚にあげ、ただ妬んで声をあげているだけ。“人間本来のはたらき”とは・・・発言の自由のことを言っているのではないか。言論と行動の制限によって怨望が生まれるのでは。という意見が出た。
- ・窮とは、当たり前前の方が何も考えられなくなって凝り固まっている状態を言うのではと自分の体験を語って、窮についての意見を言ったメンバーもいた。また、逆に、考えても考え尽くしてもその中から出られない、解決できない問題があり、どうしても怨みになるのではという意見も出た。恋愛に例えて、自分は好きなのに、精一杯やったのにそれでも離れていってしまうやりきれない感情のようなものが窮なのではという意見も出た。

○怨望・・・社会が悪いという方向性

- ・福沢的には、社会のシステムとして怨望が発生しないようにせねばならないと言っている。言論の自由が大事というのは、上から押さえつける社会では怨望が生まれてしまうため。言いたいことをはっきり言って怨望をなくすことが必要と言っているのはという意見が出た。しかしそれはそんなに簡単なものではない・・・例えにもあったが、暗殺しようとしている人間に対してそんなに心を開くわけがないという意見もあった。現代語訳と文庫版でちょっと違和感があるような。

【十四編】

○十四編から十七編は現代のビジネス書のような意見が出た。

- ・時間の計算・・・現代のリスクマネジメントでは。
棚卸し・・・ユダヤ教のタルムード（何日かおきに反省する）
- ・五升の御救米・・・社会保障論
- ・“心の棚卸し”と“世話の字の義”では言っている対象者が違うような気がする
- ・保護と指図がどちらも両立することが新鮮。
- ・政府と人民論・・・徳川幕府がただ変わっただけという風潮があったのか。人民に賢くなれということを行っているのか。

【十五編】

- ・福沢を理解する上で重要な一編。一般的には福沢は西洋が大好きで古いものを排除して外国の文化を取り入れようと主張しているというように受け取られているが・・・
- ・何が正しいのかが分からず、発狂してしまう⇒現代も同じような状況。何を信じて良いのかわからない。
- ・妄信するのはいけないが・・・バランスが重要になる。
- ・ここでは文明と文明の例えを用いているが、人と人の交際についても言えるのでは。その人の本質をしっかりと見て判断することが大切⇒これこそが勉強
- ・先入観を持たず本を読んで勉強するとあるが、勉強していろいろな本を読めば読むほど先入観に染まるのでは・・・矛盾しているのではという意見も。
- ・本を読むことで疑いが起こって、また違う本を読むことによって自分だけの価値観が生まれ、それを用いて物事を考えなさいよという意味では。“絶対的な、正しい”と決めつけるものではなく、自分の基準で判断すべしと言っているのでは。個人の考えをまず土台として作り、そこを足場にして議論することが大切だと言っているのではという意見が出た。
- ・では、開化先生も色々判断した上で西洋至上主義になっていたとしたら・・・
→“開化先生”には非常に難しい。福沢は本だけではなく、多くの物事と接し、経験を積むことも大事だと言っている。実際の体験的な勉強も含んでの判断力の勉強。
⇒⇒⇒人間交際を活発にすることが大事。
- ・上下関係なく話し合う場がなかったからこのように言っている。現代ではこういう場はあるだろうか。町人が武士に対するのと、一般人が政治家に対するのと、とれほど変わったと言えるだろうか。現実的にはあまり大差がないのでは。ただそもそも身分がないから比較するのは難しいのではという意見が出た。

【十六編】

- ・福沢の論はボードリアルに通じるところがあるという意見も。内容的にというよりは実行するのが難しい。

○ “人の働きの大小軽重” について

- ・第一について・・・どんな職についても志を持ち従事すべしと言っているのに役者より学者がえらいと言っているが・・・農業に就いていても志を持って持続しているかも関係あるのでは。
- ・第二について・・・実学については、理系がえらくて文系は役立たず、ではなく哲学も必要と言っているのでは・・・囲碁将棋よりは天文・地理・機械・数学の方が有用。しかしその中でも何がどう有用なのかは言っていない。
- ・第四・・・ものごとを批判するためには資格がいる。責任のない批判は卑怯だという意見が出た。背中で語る・行動で示すべき。

【十七編】

○ “天は人の上に人を造らず” から入って・・・

“人にして人を毛嫌いするなかれ” で終わる

⇒とてもおもしろい。活発に人間交際をすべし!!!